

日本ミルトン協会第7回研究大会 研究発表及びシンポジウム資料

於：龍谷大学 深草キャンパス

日時：2016年12月3日(土)

日本ミルトン協会第7回研究大会プログラム

日時 2016年12月3日(土) 午前11時00分より
場所 龍谷大学深草キャンパス和顔館B104教室
交通 (別紙を御覧下さい)

○ 開会の辞 (11:00~11:10) 会長 桂山 康司

○ 研究発表 (①11:10~11:50; ②12:00~12:40) 司会 西川 健誠
1. *Paradise Lost*における「自然」—その意味と由来— 岡田 義明
2. 護民官制とミルトン—クエーカー教徒迫害の狭間で 小林 七実

○ 昼食 (12:40~14:10)
[昼食は各自でご用意下さい。深草キャンパスの周辺にコンビニがあります。
また、キャンパス内にお食事のできるスペースがあります。]

○ 委員会 (12:50~14:00) 和顔館 212 教室

○ シンポジウム (14:10~16:15)
Observations on Observations ——ミルトンとアイルランド——

オーガナイザー 水野 眞理
1. 文明と野蛮 金崎 八重
2. *Intexti Britannii* 川島 伸博
3. 三つの虐殺をめぐる不都合な文書 水野 眞理

○ 総会 (16:15~16:45) 司会 桂山 康司
活動報告 川島 伸博
会計報告および予算審議 金崎 八重
会計監査報告 箭川修・菅野智城
来年度大会・研究会予定
その他

○ 閉会の辞 (16:45~17:00) 桂山 康司

○ 懇親会 (17:30~19:30)
(於：酔心 京都駅前 地下鉄かタクシーで移動)

研究発表：

*Paradise Lost*における「自然」—その意味と由来—

岡田善明

英国学士院の気象学者 James Lovelock (1919-) と全米科学アカデミー会員の微生物学者 Lynn Margulis (1938-2011) によって唱えられた「ガイア理論」(Gaia theory) では、地球は生物学的超有機体と言えるような自ら適応し調節する惑星として振る舞っているとされていて、昔から地球は生命力を持ち、地球全体の環境を正すのに影響力を及ぼしているとしている。「ガイア理論」の基本見解によると、地球は生命の星であり、生物がその環境でいろいろな状態に反応するように、内部と外部の変化に合わせて調節している。ラヴロックは温暖化にたいしても地球の異常生理作用として早期から警告を発してきた(Sterling, Joseph. 1990. *Gaia: The Growth Of An Idea*. New York: Lord Literistic Inc.)。環境破壊の危機に直面している今日、人類は今一度「自然」の意味を確認し、自然との共存の必要性が叫ばれており、物質文明のなかでの自然に対する人間の生き方が問われている。

ラヴロックは地球を生物学的超有機体として「自然」の哲学的意味も歴史的には生きた超有機体的な「自然」ととらえられてきたが、人間理性に対比される自然における理性の大切さを唱えた John Milton (1608-1674) も *Paradise Lost* (1667) の中で、ラファエロに地球について “as God in heaven / Is Centre, yet extends to all, so thou / Centring receiv’st from all those orbs; in thee, / Not in themselves, all their known virtue appears / Productive in herb, plant, and nobler birth / Of creatures animate with gradual life / Of growth, sense, reason, all summed up in Man.” (9・107-113) 「天にあつては神が中心であり、しかもすべてに力を及ぼしているように、ここでは地球が中心で、すべての天体から光を受けている。これらの光は、天体自身の中ではなく、お前の中に現れて、草や木を生じさせ、成長と感覚と理性という階段を経て生き生きと躍動する生物のより高貴な誕生をもたらしている。そしてその三つの階段のすべてを自らに集約しているのが人間なのだ」と言わせている。要するにミルトンも現代の「ガイア論」にあるような科学的な地球の自己生成的な活動を *Paradise Lost* で書いていて、それを集約しているのが人間だとしている。*Paradise Lost* ではイヴとアダムが神への信仰のもとに楽園を管理しているときには自然は人間にとって好ましい状態であったが、サタンに騙されて知恵の木の実を食べたとたん、荒廃してくる様子が描かれている。

最近のミルトン研究において、エコロジーの観点からの研究が増えてきたが、本発表において、聖書の自然の意味や、ミルトンの『キリスト教教義論』(*A Treatise on Christian Doctrine*) 等の関連作品から考察し、*Paradise Lost* における地球の自然の意味とその由来を考察することにより、「原罪」という人間精神の墮落がまた自然荒廃をももたらしていることを論考し、ミルトン文学における自然の意味を論及したい。

研究発表：

護民官制とミルトン・クェーカー教徒迫害の狭間で

小林 七実

権力に侵害されない良心に基づく共和制国家について、ミルトンはその生涯を通して詩と散文の両方で訴えた。イングランド共和国の誕生に感喜した彼は護民官制をどのようにみただろう。護民官政権下、ミルトンは二つの論文を出版している。護民官制が始まった半年後に出版された『第二弁護論』（1654年5月）と、崩壊する約二ヶ月前に出版された『政治権力論』（1659年2月）である。

護民官制は「護民官一名と議会」に最高権力を与える『統治法』（1653年12月）による。宗教事項の最終決定権は護民官にある。ミルトンは『第二弁護論』で護民官政権を擁護する一方、個人の自由な信仰生活が護られるよう、国教会制度と十分の一税の廃止をオリバー・クロムウェルに求めている。同年、護民官政権は聖職者の選出と追放を定める委員会を設け、多宗派からなる護民官派国教会を設立した。

果たして監督派や長老派と異なる信仰の自由が容認されたのか。ソツィーニ派のジョン・ビドルとクェーカーのジェームズ・ネイラーは議会で冒瀆罪による極刑に問われた。ビドルは投獄され書は焼かれた。ネイラーは厳しい体罰の末に監禁された。出版の自由の縮小、主日礼拝の監視を強化する法が承認された。クロムウェルが王位を退けた後の『謙虚な請願と助言』（1657年5月）では、三位一体論と旧約新約聖書のみを神の言葉と信じる宗派は礼拝方法や教義において寛容されるが、上記に従わず神を冒瀆するものは処罰されると明記された。

内乱期に既存の検閲制度が衰退すると、出版物は市民が政治や社会運動に参加する重要な手段になる。定期刊行物が議会討論、議決、嘆願書に関する議会答弁を迅速に伝えた。議会に宛てた無数のパンフレットや連名の嘆願書は、財産を護る権利と信仰生活の自治のため、十分の一税廃止を理想の国家の礎石とする人々の声を伝える。なかでもクェーカー教徒は出版物を積極的に活用し、各宗派が聖職者を支え集会を護る自治を訴えた。1655年から60年までのクェーカーによる出版物は800を超える。1654年に約5,000の信徒数は1659年には60,000を超えた。護民官政権下で約2,000人のクェーカー教徒が投獄され、約400人が獄中死したとされる。

ミルトンは作品の中で一度もクェーカーに触れていない。しかしながら『政治権力論』では繰り返される宗教弾圧を概観し共和制での政教分離の必然性を論じている。後の『樂園喪失』で、過ちを繰り返す人間が、他者の良心から、選び信じる個人の自由を奪うことは決してできない、と天使ミカエルに語らせ、十分の一税に依る国教会の課題を普遍的真理へと昇華させる。ミルトンが宗派を超えた自由への宿望を受け止め、護民官制をいかに捉えていたか、『第二弁護論』と『政治権力論』との比較を通して考察したい。

シンポジウム

Observations on *Observations*

——ミルトンとアイルランド——

はじめに

水野眞理

詩人ジョン・ミルトン(John Milton)が思想家としても読まれるようになって久しいが、政治パンフレットの多くはまだ十分に研究されているとはいえない。本シンポジウムは、1649年、ミルトンが共和国政府の外国語秘書官に任命されて書いた『和平条項その他についての見解』(*Observations on the Articles of Peace with the Irish Rebels, on the Letter of Ormond to Col. Jones, and the Representation of the Presbytery at Belfast* 1649年5月 以後『見解』と略す)を取り上げ、アイルランド(およびスコットランド)に対するミルトンのまなざしを検討しようとする試みである。『見解』はミルトンが公人の立場で書いたものであり、個人として書いたパンフレットとは一線を画するが、そこにはミルトン個人がはっきりと姿を現している。そこで我々は『見解』とミルトンの他の韻文・散文作品、さらにアイルランド論の先行文献を相互に参照しつつ、ミルトンの立ち位置についての見方を提案し、フロアとの議論を深めたいと考えている。

文明と野蛮

金崎八重

クロムウェルの秘書官に任命されたミルトンが、1649年に出版した政治的パンフレット『和平条項その他についての見解』は、チャールズ王の代理としてオーモンド侯がアイルランドと締結した和平条項に対する、クロムウェル及び共和国の意向を世間に広く伝える為に書かれたものではあるが、当時のミルトン自身の潜在的なアイルランド・スコットランドへの認識が色濃く出たものとなっている。

この『見解』からは、ある意味現代まで続くといえる、イングランド・アイルランド・スコットランド間の、非常に複雑な関係性が見て取れる。このパンフレットでは、イングランドとアイルランド間で起こっている対立は、単なるブリテンの主権をめぐる「支配被支配・植民地闘争」のみというわけではなく、プロテスタント対カトリックの「宗教闘争」でもあり、議会派と王統派、共和政治派と専制政治派の「政治闘争」でもある事が示されている。

ミルトンは、自身のカトリックに対する憎悪・反発を前面に押し出しつつ、アイルランド(及びスコットランド)に対する敵愾心に満ちた政治批判で『見解』の9割以上を埋め尽くしているが、その中で目を引くのは、アイルランドを「野蛮」「文明化されていない国」として文化的にも批判している部分である。ミルトンは、和平条項第22条を取り上げ、馬の尻尾で畑を耕す原始的な農法の禁止や、焼畑農業禁止の緩和を、オーモンド侯がアイルランド議会で認めた事は言語道断であり、未開の国を文明化して改善するために征服しようとしてやっているイングランドの善意を拒絶するアイルランドを、愚かだと批判している。ミルトンは *civil*、*civilizing* という言葉を使用し、*savage* や *barbarism* といった語と対比させ、*civilize* は、立場が上の者から下位の者へ行うべきものであり、*civil* であることは「人間にとって必要なことである」、と述べている。本発表では、ミルトンの詩作品における、*civil* と *savage* の対立の捉え方に注目していきたい。

『見解』以前に書かれた『コウマス』(1667-74)では、savage や barbarous と対立するのは civil ではなく chastity である。『コウマス』では、savage と chastity は、どちらが上でどちらが下というわけでも、支配と被支配の関係性というわけでもいが、chastity は savage を打ち負かすもの、とされている。一方、『見解』後の『樂園喪失』(1661-69)では、savage と civil という語が使用されている。『樂園喪失』において、savage で barbarous とされているのは、サタン本人ではなくその取り巻きの悪魔であり、civil も神や天使そのものを表すのではなく、神が人間に与える“civil Justice”(PL XII l.231)、「人道的な」正義、という意味で使用されているので、厳密には対立関係とはいえないのかもしれない。ただ、civil Justice が、天上の神が、下界の墮落した人間に与えるべきものである、という文脈で使われている点で、『見解』における、ミルトンの文明化に関する考え方の影響が見て取れるともいえるだろう。

Intexti Britannii

川島伸博

1649年5月、ミルトンが共和政府のスポークスマンとして初めて執筆した『和平条項その他についての見解』は「アイルランド・スコットランド問題をもっぱら取り扱ったミルトンによる唯一の書」(小野功生『ミルトンと十七世紀イギリスの言説圏』)であり、ミルトンにおけるブリテン問題を考える上で、貴重な視座を提供してくれる。本発表は、まず『見解』におけるミルトンの執筆者としての代表意識(どの国民、どの集団のためにミルトンは書いているのか)を、ミルトンの代名詞の使い方を分析することで確認する。そして、その議論を踏まえた上で、ミルトンとブリテン問題について再考していく。

アイルランドとスコットランドに対する敵意があからさまに表明されるこの『見解』において、ミルトンは「ブリテン」という言葉をただ一度だけ用いている。国王チャールズの名代としてオーモンド侯がアイルランドのカトリック同盟と結んだ『和平条項』の第一項は、アイルランド人たちに首長令(The Act of Supremacy)への宣誓を免除する内容になっている。そもそも、この首長令への宣誓は、国内の教皇主義者たちを追い込むための施策である。ミルトンは、この宣誓義務をアイルランド人から免責することは、カトリック勢力に権力を与えることになるだけでなく、「ブリテン人の忠誠(British Loyalty)に泥を塗る」ことになると憤る。ミルトン曰く「アイルランドの反逆者たちが宣誓するのが、Allegiance だけなのに対し、ブリテンの臣下たち(Subjects of Britain)が Allegiance と Supremacy の二つに宣誓しなければならないのだとしたら」、アイルランド人と比べて、ブリテン人は信頼されていないということになるからである。

ここでミルトンは、「ブリテン」という言葉を、カトリック国アイルランドと対置させ、イングランドとスコットランドによるプロテスタント共同国家という意味で用いているのは明らかである。興味深いのは、それでいて、『見解』の後半の大部分は、アイルランドのアルスター地方に入植している長老派のスコットランド人たちへの不信感の表明と批判になっている点である。2014年の国民投票で、僅差で保持されることになったイングランドとスコットランドによる連合王国ブリテンという共同幻想は、17世紀のジェイムズ即位以来、つねに危機にさらされてきた。そして、ブリテン幻想の揺籃期に生きたミルトンの生涯は、この幻想に魅惑され、そして幻滅していく過程として捉えることができる。ミルトンの国民意識は、初期作品や手稿におけるブリテン叙事詩構想に見られるブリテン幻想への信頼から、『見解』の直前に書かれた『ブリテン史』(*The History of Britain, That Part Especially Now Called England*)、そして『見解』後に書かれる『イングランド国民のための弁護論』(*Pro Populo Anglicano Defensio*)におけるブリテン幻想への幻滅を経て、次第に縮小していく。そして、逆説的だが、幻滅の繰り返しにより彼の代表する「国民」が限りなく小さくなっていくことで、ミルトンは「国民」の枠を超えていくのである。

本発表の目的は、『和平条項その他についての見解』の執筆において、ミルトンがエドマンド・スペンサーをどのように咀嚼し、あるいはそこから影響を受けているのか、に光を当てることである。このようなアプローチは、既に一貫してポストコロニアルの立場から初期近代のアイランド状況を論じてきたメイリー(Willy Maley)によってなされているが、本発表ではメイリーも参照しつつ、主に彼に触れられていない「massacre (大虐殺) と言葉」、というテーマを扱いたい。

アイランド人が、初期近代の大虐殺と聞けば念頭に浮かべる事件が三つある。

(1) 1580年、南西部ディングル半島先端のスメリックに作られたカトリック勢力(アイランド人およびスペイン人、イタリア人)の砦を総督グレイが率いるイングランド軍が包囲して降伏させ、その後600人超を殺した。グレイの秘書としてスペンサーも同行していたと考えられている。

(2) 1641年、北部のアルスターでカトリック勢力による蜂起が起こり、4000人(?)から30万人(?)のプロテスタント・イングランド人入植者を殺害した。

(3) 1649年8月クロムウェル率いる議会軍がダブリンに上陸、東海岸から南海岸にかけての各地で数千単位のアイルランド人を殺した。

(1)では、国際法に反して降伏した敵を殺したことで総督のグレイが批判的になり解任、召還される。1596年にスペンサーはかつての上司であるグレイを擁護する文章をその植民地経営論『アイランドの状況管見』(*A View of the State of Ireland*)の中で展開するが、その出版は1633年(ストラフォードがアイランド総督に着任した年)まで行われなかった。ミルトンがこの1633年版の『管見』を1642年から44年ごろに読んだことが『備忘録』(*Commonplace Book*)の分析から判明しており、『管見』が『見解』に影響を与えたことは疑いを入れない。

(2)の後、1645年に国王代理オーモンド侯と叛乱カトリック勢力の代表であるマスケリー男爵との間に和平協定が結ばれ、翌1646年ダブリンとロンドンで王室公認のもとその条項が出版される。さらに1649年1月、当初の条項を増補・改訂する形で和平協定が結ばれる。この第二和平協定の13日後に国王チャールズは処刑され、共和国政府は外国語秘書官ミルトンに、協定に対する反論『見解』を執筆させた。(出版は5月)この『見解』中でのミルトンのクロムウェル称賛と、『管見』におけるスペンサーのグレイ称賛の間にはパラレルな関係を見出すことができる。また『見解』は、アルスターの長老派に対する批判に多くのページを割いており、結果的に、(3)のクロムウェルのアイランド征服を事前に正当化するものとなっている。

このようにスペンサーとミルトンの政治文書は、絡み合いながら初期近代のイングランドとアイランドの関係の中のもっとも血なまぐさい流れに掉さすものとなっており、それらを通して我々は二人の詩人の不都合な面に直面させられる。スペンサーは詩においては理想的な牧歌世界を歌いながら、他方アイランドに関しては「野蛮な」生業たる牧畜を「文明的な」農業に転換させることを提案している。そして若いミルトンは牧歌「リシダス」("Lycidas" 1637)に聖職者批判を入れたが、聖書的隠喩以上のものではなかった“*But that two-handed engine at the door, / Stands ready to smite once, and smite no more.*” (130-31)という一節は、のちに不吉な現実味を帯びるのである。